



TITLE:

<紹介> 川口琢司著 『ティムール帝國支配層の研究』

AUTHOR(S):

磯貝, 健一

CITATION:

磯貝, 健一. <紹介> 川口琢司著 『ティムール帝國支配層の研究』 . 東洋史研究 2009, 68(2): 321-330

ISSUE DATE:

2009-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/160351>

RIGHT:

紹介

川口琢司著

ティムール帝國支配層の研究

磯貝健一

本書はティムール帝國の政治史に正面から取り組んだ、まさに力作と呼ぶに相應しい仕事である。まずは、四部九章から成る本書の構成を示しておく。

序

一・ティムール帝國の時代

二・研究の視座と展開（書き下ろし）

第一部 ティムール帝國とチングス・ハン家

第一章 ハン制度の成立と展開

第二章 ティムール帝國の對チングス・ハン家婚姻政策

第二章 ティムールの後継者問題

第三章 ティムールの後継指名とシヤールフ政權の成立

第四章 ファールス總督イスカンダルの反亂をめぐる

第三部 テュルク・モンゴルの法制と祖先傳承

第五章 ティムールとヤサ

第六章 テュルク・モンゴル傳承と四

ウルス敘述法（書き下ろし）

第四部 ティムール帝國の部族とアミール

第七章

ティムール帝國のテュルク・モンゴル諸部族に關する新史料

第八章 部族出身のアミールとその諸活動

第九章

ティムール帝國のグラムとグラム出身のアミール

結語（書き下ろし）

「序」の「一・ティムール帝國の時代」

では、きわめて簡潔にティムール帝國の歴史が概観される。つづく「二・研究の視座と展開」では、本書の目的と研究上の手法が提示される。著者によれば、本書の最大の目的とは、ティムール帝國前半期——本書においては、初代ティムールと第三代シヤールフの時代を中心とするティムール帝國の成立期・全盛期と定義される——のテュルク系支配層、とりわけティムール家帝

室とアミール層に焦點を當てることにより、その帝國支配層としての特質を説明することにある。そして、この目的を達成するために著者が採用した研究の手法とは、以下の三點に集約される。

① テュルク系支配層を考察するために必要な年代記の史料論的研究

② ティムール家帝室とチングス・ハン家との關係についての研究

③ アミールの傳記的人物研究

上記の研究姿勢は本書中で一貫しているが、とくに、①の年代記の史料論的研究は第四、六章に、②の兩家の關係についての研究は第二章に、③のアミールの傳記的人物研究は第八、九章において際立っている。以下、第一章から第九章にいたるまでの内容を、評者による論評をくわえながら紹介してゆこう。

第一章 ハン制度の成立と展開

ハン制度とは、ティムール帝國で採用された、チングス・ハン直系の子孫をハン位につける制度のことをいう。著者は、從來の諸研究においては、ティムール帝國におけるハン制度成立の背景を明らかにする視點が希薄であったことを指摘し、ハン制度

の成立とその後の展開について考察しようとする。

著者によれば、ハン制度はティムール帝國のオリジナルな制度ではなく、既に先行するチャガタイ・ウルスの時代に、主としてチャガタイ系の傀儡ハンを擁立する傳統が存在していた。一三七〇年、ティムールもまた配下のアミール達の要請を受けてオゲデイ系のソウルガトミシュをハンに即位させるのだが、ここでオゲデイ系のハンが選擇されたのは、ティムールのライヴァルであったカザガン一族が、それまでチャガタイ系のハンを擁立していたことに對抗する意味合いがあったという。ティムール統治期のハンはいくまで傀儡的存在であり、首都サマルカンドの一地區で軟禁状態にあったが、一方で、ティムールの命令は、ハンの命令という形式を踏んで發布されていた。

ティムール死後のハン制度について見ると、第二代君主ハリール・スルターンはチンギス・ハンの子孫ではなく、ティムールの曾孫であるムハンマド・ジャハーンギールをハンに推戴した（この問題については第三章で取り扱われる）。また、第三代シ

ヤールフはハンを置かなかったが、サマルカンド政權のウルグ・ベグはハンを擁立している。しかしながらウルグ・ベグの時代になると、もはやハンは軍事遠征に参加することもなく、貨幣にもその名が見られなくなるなど、その地位と權威は著しく低下した。そして、第七代アブー・サイード治下の一四五〇年代後半に至り、ティムール帝國のハン制度は終焉を迎えたのである。

以上が第一章の内容であるが、ハン制度の淵源とその終焉までを明快に敘述しているといえよう。後代の史料である『タリヒー・ラシーデイー』に依據する點が多いことは若干問題であるが、これは同時代史料のみによってハン制度の問題を扱うことが困難であるという史料上の制約を反映したものである。

第二章 ティムール帝國の對チンギス・ハン家婚姻政策

本章は、ティムール家とチンギス・ハン家との婚姻それ自體がティムール朝君主達の重要な政策であったとする見地から、ティムールがチンギス・ハン家との婚姻政策を推進した背景、および、ティムール帝國史全體の流れの中での、ティムール家とチ

ンギス・ハン家との婚姻關係の變化と特質につき考察しようとするものである。

以下、著者は主に『マイズブルアンサーブ』に依據しつつ、一三六〇年代から一六世紀初頭に至るティムール家とチンギス・ハン家の成員同士の婚姻關係を描き出してゆくが、その全貌については本書に譲り、ここでは歴史研究上重要と思われる事項のみを抜書的に紹介しておくことにする。

まず、チャガタイ・アミール達とチンギス・ハン家成員の間の通婚關係、および、前者とティムール家成員の間のそれを敘述する中で、ティムールはチンギス・ハンの父系の血統だけでなく、母系の血統も尊重していたことが指摘される（本書三四―三九頁）。

一三七〇年、ティムールはライヴァルであるフサインとの權力闘争に勝利し、次いで、後者の正妻にしてチャガタイ系カザン・スルターン・ハンの娘であるサライー・ムルクを娶って「ハン家の女婿（キュレゲン）」としての立場を得た。碩學バルトリドは、まさにこれをもってティムールは他のアミール達よりも優位な立場を獲得したのだとするが、この通説に對し著者は

以下のように反論する。即ち、ティムールがサライ・ムルクと結婚した政權樹立當時は他にもキュレゲンの資格を有するチャガタイ・アミールが存在しており、ティムールがキュレゲンを名乗ることでもだちにその地位を有利にしたとは思われない。そして、ティムールがキュレゲンの稱號を誇ったとすれば、これらキュレゲンの資格を有するチャガタイ・アミール達がティムール政權から排除された一三七五年以降のこととすべきである（本書注12）。

チンギス・ハン家の者ではないが、ティムールの正室のうち唯一男子を設けたトゥルミシュの出自についても著者は興味深い指摘をなしている。即ち、『ムイッズルアンサーブ』の記述よりトゥルミシュはガンチ部族の出身であり、さらに、ティムールは一三五六年以前、つまり自身が十代後半の時期に彼女を娶っている。この結婚の背景として、一四世紀前半にチャガタイ・ウルスのハン達が本據としていたカシカ河下流地方に、ガンチ部族とティムールが属するバルラス部族が居り、兩者の間に接觸・交流があった點を考慮すべきである（本書四五―四七頁）。

最後に、著者は本章の内容を以下のよう
にまとめる。即ち、ティムール帝國一代を通じて、ティムール家とチンギス・ハン家（ジョチ系、チャガタイ系、オゲデイ系）は密接な婚姻關係を築き、それは半ば常態化していた。ティムール帝國は、隣接するモンゴル系諸政權と婚姻を通じて密接な關係を維持していたのであり、婚姻關係の構築はティムール帝國とこれら諸政權の外交の樞要であった。

以上、本章の概要を紹介した。ティムール家とチンギス・ハン家の婚姻關係につき、系圖を附しながら、その詳細を明らかにしたことは學術上大きな貢獻であるといえよう。また著者は、ティムール家成員の系譜についても、バルトリドや閭野等、ティムール朝史の碩學が提出した學説を逐次訂正、補強しており、この點も高く評價できる。

第三章 ティムールの後繼指名と シャールフ政權の成立

ティムールは遺言で自身の孫にして、次男ジャハーンギールの息子であったビール・ムハンマドを後繼者に指名したが、實際に後繼者の地位を獲得したのはティムー

ルの別の孫、ハリール・スルターンであった。著者はティムールの後繼問題について、次の様な問題を提起する。即ち、ティムールの遺言は尊重されることはなかったのか。さらには、後繼者指名の時點で三男アミール・シャーと四男シャールフが健在であったにもかかわらず、ティムールはなぜ息子を差し置いて孫を後繼者に指名したのか。以上のような問題意識に立脚して、本章ではティムールの後繼指名からティムール死後の内亂を経て、シャールフ政權の成立に至る一連の流れの中で、いかなる政治力學が働いていたのかにつき考察が進められる。

ティムールは、おそらくは四子のうち唯一の嫡子であったためか、次男ジャハーンギールを重視する姿勢をみせていた。ところが、そのジャハーンギールが一三七六年に逝去すると、一三九八年、ティムールはジャハーンギールの長子、ムハンマド・スルターンを自身の後繼者に指名した。著者によれば、本来ティムールの後繼候補のうち最有力であったのは三男アミール・シャーであったが、ティムールはチンギス・ハンに遡る母方の血筋を重視して敢えてムハンマド・スルターンを後繼者に選んだの

だという。ちなみに、一三九九年に生起したアミール・シャーの反亂の背景には、この後繼指名に對する彼の不満があつたとする。

ところが、ムハンマド・スルターンは一四〇三年に死亡する。このため一四〇五年、ティムールは自身の死に際して、ムハンマド・スルターンの異腹の弟、ピール・ムハンマドを後繼者に指名した。著者は、この後繼指名の理由として、史料に記載されるような年齢や長幼の序列だけでなく、母親の出自であるとかその婚姻形態——正室であるか側室であるか——も重視されたとみている。

しかしながら、この後繼指名は遵守されず、結局ティムールの後繼者の地位はその死後に逸早く首都サマルカンドを掌握したハリール・スルターンにより奪取された。

著者によれば、「ハリール・スルターンはチンギス・ハン家の血統と一種の王權神授説によりティムールの後繼者としての正統性を主張し、父方を通じてチンギス・ハンの血を引くムハンマド・ジャハーンギールの血を傀儡ハンに指名することにより（評者註…第一章參照）、その正統性を補った」（本

書一〇八頁）のである。

一方、ティムールの四男シャルフは一貫してティムールの遺言を遵守し、ピール・ムハンマドの後繼を支援する立場をとっていたが、一四〇七年、ハリール・スルターンはついにピール・ムハンマドを暗殺してしまふ。著者に言わせれば、「シャルフはハリール・スルターン政權を打倒して帝國の最高權力の座につくための大義名分と支配の正統性を勞せずして獲得した」（本書一二二頁）のである。結局、シャルフはハリール・スルターンとの闘争に勝利し、ここにシャルフ政權が成立した。

以上が第三章の内容である。ティムールの後繼者問題を、後繼の「正統性」をキーワードとして明快に敘述した點は評價に値しよう。また、著者の敘述からはこの「正統性」が、チンギス・ハン家に連なる血統にも大きく依存していたことが垣間見える。

第四章 ファールス總督イस्कандルの

反亂をめぐって

一四一四年、ティムールの孫にしてファールス總督の地位にあつたイस्कандルはシャルフに反逆し、シャルフ政權は成立以來最大の危機を迎えた。本章は、フ

ァールス總督時代のイस्कандルと關係の深い史料三點を取り上げ、これらの史料に織り込まれたイस्कандル、および、シャルフの政治的意圖を検討することであらためてティムールの後繼問題を考察するものである。

まず一點目に取り上げられるのはイस्कандルに獻呈された、「イस्कандルの無名氏の史書」と呼ばれる作品である。本作品中ではイस्कандルと、その父、ウマル・シャイフには美麗な尊稱が適用される一方で、シャルフには極めて簡素な稱號のみが使用される。著者によれば、こうした事實は、本書が執筆された當時、イस्कандルが帝國權力を掌握していたシャルフに對し叛意を抱いていたことを推測させるものであり、この推測が正しければ、本書はイस्कандルがシャルフに反逆した一四一四年初頭以降、同年七／八月に權力を失うまでの間に書かれた可能性が高いという。さらに著者は、ティムールがイस्कандルを自身の後繼者に指名した等の記述を含む、一三九四年の出來事を敘述する記事内容を分析し、「本書には權力闘争に勝利してシャルフに取って代わろうと願う

イスカンダルの野望が投影されている」(本書一二五頁)とする。

次に著者はイスカンダルの無名氏の史書の改訂本たる『ミーン史選』の分析へと移る。本作品は明らかにイスカンダルへの賛辭を削除してシャルフに獻呈されたものであり、さらに、本書では「シャルフに敵對的なイスカンダルの孤立が印象づけられている」(本書一四七頁)という。

三點目は、トプカプ宮殿博物館附屬圖書館所藏田本に寫本に收録されるティムール一門の歴史に關連した小品である。奥附から判斷するに、本作品は一四一三年六月に作成されたもので、さらに、その内容から本作はそもそもイスカンダルの強い影響下で成立したものであったことが推測されるという。本作品においては、シャルフについて好意的な記述がみられるが、同時に、イスカンダルをシャルフと對等に扱おうとする態度も明確である。これについて著者は、「本書が」書かれた一四一三年六月の時點で、イスカンダルは、ティムールの遺言(ジャハーンギール一族への後繼指名)を無視して自分こそがティムール死後の帝國の眞の後繼者であるという意識を

強めていた。しかしながら(中略)シャルフとはいまだ公然と對立する狀況になつていなかったことが理解される」(本書一五五―一六頁)と分析する。けれども、「イスカンダルの無名氏の史書が書かれた一四一四年前半の時點になると、イスカンダルはシャルフに對して挑戰的となり、明確に反逆的な言動をとるようになっていく」(本書一五六頁)のである。

以上が第四章の概要である。上記三點の史料にみられる表現の微妙な差異から、イスカンダル、および、シャルフの心情の變化を読み取るうとする著者の作業は、一編の謎解きをみるようであり、まさに文獻學の醍醐味といえる。ただし、それゆえに本章でなされた著者の推測はときに大膽すぎるきらいもある。

第五章 ティムールとヤサ

本章は、ティムール治下のヤサの實態、および、ヤサとシャリーアの關係について考察するものである。ちなみに、著者によれば、ティムール帝國史料におけるヤサ(北トレ、ヨスン)はチングス・ハンの法令に限定されるわけではなく、チングス・ハン以降の遊牧君主やティムール自身が定

めた法令を指すこともあるという。ティムール時代の著述家、イブン・アラブシャリーによれば、ティムールはヤサにもとづく統治體制を作り上げた一方で、シャリーアの尊重にも意を砕いていたとされる。ただし、ティムールは「チングス・ハンのヤサ」をシャリーア以上に遵守しており、當時のウラマーたちはヤサをシャリーアに優越させるティムールにたいして「不信者」の裁定(ファトワー)を下していた。

このようなティムールにはヤサの復興者としての側面も認められる。即ち、チャガタイ・ウルスでは一四世紀半ば以降の政治的混亂期においてハンの地位と同様、ヤサの權威も著しく低下したが、「ティムールは、チングス・ハン直系の子孫を傀儡ハンに擁立し、チングス・ハンのヨスンとヤサの復興を高らかに宣言することにより、モンゴルの權威を借りて自身の權力を正統化しようとした」(本書一七四頁)のだという。

次いで著者は、ヤサとシャリーアの運営について考察を進める。著者は、ティムール治世初期に反亂者がヤサにもとづいて審理されるものの、結果として、シャリーア

が規定する同害報復刑という處罰をうけた事例等に注目し、ティムールがヤサを重視した反面、中央アジア社會に浸透していたシャリーアを無視できなかったこと、および、ティムール政權の成立當初からヤサとシャリーアが同一法廷で運用されていたであろうことを指摘する。また、ティムール治世末期には「チンギス・ハンのヤサ」にもとづいて審理をおこなう「大法廷(bu'alaq b'au'alaq)」が開催されるようになるが、この時期になると「チンギス・ハンのヤサ」によりテュルク・モンゴル系の帝國支配層を審理する司法上のシステム・制度が整備されていたのだという。

以上が第五章の内容であるが、ティムール治世期のヤサとシャリーアに關連する諸問題の解決に一定程度の見通しを與えた點は評價に値しよう。ただし、ティムール治世期、さらには、ティムール帝國期におけるヤサの内實が如何なるものであったのかという點についてはさらなる考察の必要があるように感じられた。

第六章 テュルク・モンゴル傳承と

四ウルス敘述法

本章は、ティムール帝國で著された年代

記に見えるテュルク・モンゴル傳承の特徴について考察するものである。その際まず、ヤズデイー「序章」の内容が検討され、次いで、シャーミー「勝利の書」以降のティムール帝國期史料におけるモンゴル帝國史の記述法が考察の対象とされる。

ヤズデイー「序章」とは、同著者の「勝利の書」本文に先行するこれとは別個のテキストである。「序章」の内容の大半は、I. テュルク・モンゴルの系譜傳承、II. チンギス・ハンとその子孫の歴史、III. ティムールの祖先の物語、の三種に大別される。このうちIIIについては、ヤズデイーがシャーミーの「勝利の書」を踏まえつつ、ティムールの祖先について大幅に事實とフィクションを取り混ぜて創作した物語とみられるが、ティムールの祖先をチンギス・ハンの祖先と結び附けた物語としては最初のものであり、この點に「序章」の獨創性がある。また、I については、ヤズデイーはラシードウッディーン「集史」にみえるテュルク・モンゴル傳承と、ムスタウフィー「選史」のそれとの両方のヴァリアントを取り込んだ、獨自のテュルク・モンゴル傳承を收録する。

つづいて著者はラシードウッディーン「集史」で確立されたモンゴル期ペルシア語史書におけるモンゴル帝國史の記述法と、シャーミー「勝利の書」以降のティムール帝國期史料におけるそれを比較する作業を行う。著者によれば、前者の記述法においては「各ウルスの獨立性よりもモンゴル帝國の統合とそれを象徴するカアン（カハーン）の系譜が強調された」（本書一九七頁）のに對し、シャーミー「勝利の書」はモンゴル帝國史をチンギス・ハンの四子に起源をもつ四つの支配領域に分けて敘述するという特徴を有する。著者はシャーミーが採用したモンゴル帝國史の敘述方法を「四ウルス敘述法」と呼び、これがイस्कンダルの無名氏の史書、『ムイーン史選』、ヤズデイー「序章」にも引き繼がれたとする。さらに著者は現存しないウルグ・ベグの史書『四ウルス』の内容を他史料の記事から推定し、『四ウルス』がヤズデイー「序章」のモンゴル帝國史の記述を直接増補・改訂した作品であるとした。

最後に著者は、シャーミーに始まるティムール帝國の宮廷史家たちがなぜ四ウルス敘述法を採用したのかという問題を立て、

これがティムール帝國の周邊にモンゴル系諸政權（北元、ジョチ・ウルス、モグール・ウルス、ジャライル朝）が分立するという、當時のユーラシア情勢を踏まえた敘述法であったとする見解を提示する。

以上が第六章の概要である。ヤズデイー「序章」の史料性格について明確な見通しを示し、さらには、『四ウルス』の著者をウルグ・ベグとし、その内容についても妥當性の高い推定をなしたことは、史料學上大きな貢献であるといえよう。また、モンゴル系諸政權の統合性を重視するモンゴル史料に對し、ティムール帝國期史料においては、當時のユーラシア情勢に鑑みて四ウルスの分立を強調する敘述がなされたとする指摘はきわめて重要である。

第七章 ティムール帝國のテュルク・モンゴル諸部族に関する新史料

本章は、ハーフェズ・アブルの『歴史集成』のうち、従来史料の價値を認められてこなかった、第三部に含まれるテュルク・モンゴル諸部族史を利用し、シャルフ時代中期までのティムール帝國の有力部族について、従来知られていなかった情報提示しようとするものである。著者によ

れば、上述のテュルク・モンゴル諸部族史は大部分がラシードウツデーン『集史』に依據するが、ティムール帝國期まで存続した部族については、その後の情報書き加えられており、史料的に重要であるといふ。

以下、本章ではこの諸部族史にみえる、断片的ではあるが歴史研究上重要な記事が列擧されるが、その詳細については本書に譲る。ここでは、「チャガタイ・ウルスやジョチ・ウルスにおける部族再編の動向の把握は、これらのウルスの歴史を解明する上できわめて重要な課題だが、實は、この課題はティムール帝國諸史料からある程度明らかにすることが可能なのである」（本書三三六頁）とする著者の指摘を紹介するとどめておこう。

第八章 部族出身のアミールとその諸活動

本章は、ベルグト部族出身で、ティムール政權とシャルフ政權の雙方において活躍した帝國前半期を代表するアミール、シャーマリク（一四二六年没）の事績を描き、ティムール政權からシャルフ政權への交替と兩政權の變質の政治的ダイナミズム、

さらにはアミールの社會的役割を考察しようとするものである。本章ではまず、シャーマリクと密接に關係する史書、タージユツサルマーニーの『美の太陽』について文獻學的な考察がなされ、次いで、シャーマリクの事績、彼と知識人との交流、彼の建築活動について敘述される。以下、シャーマリクの事績について描寫される箇所を中心に本章の内容を紹介しよう。

シャーマリクの生年、および、ティムールに仕え始めた時期は不明である。彼は、一三九一年、同じベルグト部族出身で掌璽官のエギユ・テムルが戦死したためその地位を繼承した。シャーマリクを含むベルグト部族出身者はティムール時代からシャルフ時代にかけて中央・地方の諸政權の掌璽官に就任していたという。以後、シャーマリクは軍事面で重要な働きをなすなど、ティムールの側近として活躍する。

一四〇五年二月、ティムールがオトラルで死去すると、ティムールの軍中にあったシャーマリクとウルグ・ベグは同年三月にアンダフドでシャルフに合流した。以後、シャーマリクはシャルフ政權に加入することとなる。シャルフ政權は一三九

七年に成立しているの、結果としてシャーマリクは政權成立から八年を経た後、シャールフ、および、その政權のスタッフたちと個人的なつながりをまったくもたないまま政權に参加することになる。シャールフ政權内でシャーマリクは財務長の行政官僚となり、配下には一萬人規模の臣下、兵士を従えたという。また、シャーマリクはウルグ・ベグを無事に父シャールフのもとに送り届けたため、一四一一年までウルグ・ベグを補佐する役に任ぜられた。

つづく一四〇五年から一四一一年までの期間、シャールフ中央政權下で反亂事件が續發した時期にあたる。著者によれば、この時期生じた諸々の反亂の原因は、新参者のシャーマリクがシャールフ政權内で急激にその地位を上昇させ、これが他者の不満を惹起したことにあったという。この動亂の時期が終わったのちの一四一三年、シャーマリクはシャールフによりホラズムの統治者に任ぜられ、一四二六年に彼はこの地で没した。

以上が本章の概要である。著者は、様々な史料からシャーマリクという帝國有力者の経歴を見事に再構成してみせた。また、

シャーマリクがシャールフ政權下で地位を上昇させたことが、一方では様々な反亂を惹起したという指摘は、政治史的見地からはまことに興味深いものである。ただし、著者が本章冒頭で述べるような「ティムール政權からシャールフ政權への交替と兩政權の變質の政治的ダイナミズム」が描き切れているかといわれれば多少疑問も残る。

第九章 ティムール帝國のグラームとグラーム出身のアミール

グラームとはもともと「少年」の意で、宮廷や有力者等の家で用いられた奴隸身分の小姓・近習を指す。本章は、グラームの起源・存在形態に留意しながら、これをティムール帝國史に位置づけようとするものであり、ティムール、ハリール・スルターン、シャールフ各政權下におけるグラームが考察の対象とされる。

まず、ティムール時代のグラームであるが、一三七〇年の政權成立以前においてティムールは以下の三つの手段によりグラームを獲得していたという。①臣従の證として部族から人質を取り、これをグラームとする、②配下の部族が所有したグラームや奴隸を自身のグラームとする、③故郷ケシ

ュ地方でグラームを獲得する。のち、一三九〇年代以降、ティムールが西アジア、ロシア、インド方面への遠征を繰り返し、多種多様な民族を征服するようになると、戰爭捕虜や獻上によりティムールのもとには年少の男女の奴隸たちが集積された。ティムールはこれら大量の奴隸を帝國の有力者たちに下賜していた。一方、ハリール・スルターン政權では、グラーム出身のアミール、アルグンシャーが政權内で重要な役割を果たすなど、政權内におけるグラームの活動が目立っていたという。

また、著者はシャールフ政權におけるグラームを考察するために、一四〇六年五月から一四〇七年夏にかけて生じたサイード・ホージャの反亂を取り上げている。というのも、この反亂では首謀者であるサイード・ホージャにグラーム出身のサイフッディーンとウジ・カラの息子たちが加擔しており、反亂自體、グラーム出身者を中核として引き起こされたものとみなしえるからである。著者はこの反亂の一面として、グラームを重用するハリール・スルターンが、サイード・ホージャを筆頭とするシャールフ政權下のグラーム勢力を離反

させて自身の側に取り込み、シャルフの権力基盤に打撃を與えようとした、とする見解を提示している。

以上が第九章の内容であるが、これまで本格的に研究されてこなかったティムール帝國におけるグラームの問題に取り組んだ労作といえるだろう。また、多様な史料群からサイド・ホー ज्याの経歴を詳らかにした点は大いに評價すべきところである。反亂の背景として、グラームを重用するハリール・スルターン政權が、シャルフ配下のグラーム勢力を取り込もうとした、との見方はさらなる檢證が必要ではあるが、非常に大膽かつ魅力的な提言ではあろう。

ここまで本書に收録される全九章の内容を個別に紹介したので、以下總評に移ることにしよう。

これまで紹介してきたように、本書はティムール帝國の王族、テュルク系軍人、さらには個々の部族の活動に着目しつつ、同帝國の政治史と制度史を説明しようとするものである。著者は多言語にわたる史料群に十分に目を配るのは勿論のこと、とくに、その難解なことで知られる當該時期のペル

シア語史料を丹念に読み込むことで、見事、所期の目的を達することに成功しているといつてよいだろう。

ただし、本書が『ティムール帝國支配層の研究』と題されているにもかかわらず、その「支配層」が王族とテュルク系軍人とに限定されていることには注意すべきである。というのも、ティムール帝國の支配層には王族や軍人のみでなく文官も當然含まれるべきであり、さらには、當時各方面に多大な影響力を行使していた宗教指導者層——スーフィー・シャイフや高位のウラマー——も「支配層」の内に数えられねばならないからである。

また、ワクフ文書をはじめとするティムール帝國期の文書史料は、主に舊ソ連の碩學チェホーヴィツチにより相當数が公刊されているが、本書中ではこれらの史料も利用されていない。著者自身、本書「序」において、ティムール帝國の「社會」にかかわる研究は本書では行い得ない旨を明言しているが（本書六頁、「國家」についてはきわめて詳細かつ説得力ある論旨が展開されているのだから、「社會」についてもなんらかの目配りがなされていれば本書

の價值は更に高まったことであろう。

ただし、以上述べた諸點は本書の價值それ自体を貶めるものではない。また、ティムール帝國の「社會」に取って踏み込まない一方で、著者の研究上の視線はティムール帝國と同時期、および、これに前後する時代の、周邊のテュルク系政權にも向けられている。たとえば、著者の「キプチャク草原とロシア」（岩波講座世界歴史11 中央ユーラシアの統合 九一—一六世紀、岩波書店、一九九七年、二七五—三〇二頁）は一三世紀から一六世紀のキプチャク草原におけるジョチ・ウルスの成立、解體、再編過程をやはり「國家」の觀點から取り扱う。さらに、著者は長峰博之と共に當該時期のジョチ・ウルス研究においてきわめて重要な史料であるテュルク語作品『チンギズ・ナーマ』の校訂、譯注作業も世に問うている（ウテミシユ・ハージー著『チンギズ・ナーマ』解題・譯注・轉寫・校訂テクスト、川口琢司・長峰博之編、菅原睦校閲、東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇〇八年）。これらの研究は本書には含まれていないものの、本書中の至る所で、中央ユーラシア全域を視野にいれ

た著者のテュルク系支配層についての研究成果が看取されるのである。

最後に、本書がタイムール帝國史研究を志す學生、研究者の雙方にとって必見の研究であることを申し述べて、本書評を終えることとしたい。

二〇〇七年四月 札幌 北海道大學出版會

A五版 三九九頁 七二〇圓